當世見聞集　青

リ5
2081
1

序

武陽とよし国乃かたはらにたゝかれたる元と里村殿の方の庭の林さかんなる思ひましし秋の禄八乙丑の年生まれしより このかた参拾九とししまき世上の日月を語るまて九十となりぬるに河内の郎信玄三代年野波元の度武将のしるしよされは代々の捨代の内にて元の中にて日本の誰か足をもつけたる人なんたいあれとも是をこゝに思ひ出さるれ一つには哀しこゝ世の中にもまゝふるし侍る事誰もみなあはれなりき

早稲田大学図書

門 り 休
號 2081
巻 1-5

記述しまゐ上首落のむしなこゝのに出れしまも
衣しく絶まりて言系にて人あすべき志しね
あなる名京しいはしうわき御本へ産よ世に流
布さうしとへ下まかしこ紀人なる敷なとまつり
らうとしるうへうかへ名目式多時行にほ分のかたい
若まは以しいを伝しふ是霜を送りて本ねら寸
あ好うさよさされしまゐへしなとどゆたりあに
とふまてど首の是非なとしあらく著ふしき
首あまてど落うまあしけうの首りふをあまの
世しく〳〵是でつ印が周ん事しゆうしくらしるき
事なを伝まへく此筆乃ちを伝ひふ志ふしけ
形うと

見聞集巻之壹

目録

萬民みなしばゐ好む事
養生針灸命なる事
吉祥寺門前の池水に橋乃事
江戸町屋ぶきの事
江戸河口於北おんぎれ事
将棊盤月迷婦これる事
下帯ゆふしへいのいる事

見聞集巻之二

目録

夢ハ不思議なる事
平文所形儀男ハ拵る事
古き文ハ虚言之事
仲法入道無をこのむ事
久那夫ハ沛滿の子牛宗悦合る事
一里塚はしまる事
去云浄土法論の事
人乃振舞性ニ似たる事
多くハの綱のむ事
道沛月羽鑿紙にて有しよる事
花賞道人としふる事
鷲織法師ノまる事
沢ミの川梢よいかしれ有る事
東海月こゐ實貝府へ状事

江戸にして都にもなき事
当世らうさいはやる事
蒲井浦飛師の恩忘るゝ事
下郎のことの世にもれ出る事
三宅平吉郎三本走る事
歌舞妓女更下々の花はじまる事

見聞集巻之二

万民各好しばよ道数有事

見しは今三浦の浄心年よりてなきあまの人命かゝる当年の春江戸自輪しく曇りあまた光を徳くるは物あしく見ゆる近代九我にきまちの古民まさしく天下安楽なりとて一両年よろこぶとぞんずるのみ有しさるよ今が治顕の世なるべし人なし実しく古民の家を見聞なれども人まゝし私云にありてず今は世の人間に東果安居完たと去くのしびたる極楽の中にありともくるしき仏の世界

なりされば形じかに敵も人をもうしなひ雑をまもり
定べきものや盲亀の浮木優曇華なるべし

壽命并長命の事

それ人壽は限りなし歳の限りもあらねども
人百年ぞへまうりたまひしが三百年以来の時代を
くだりてよりくだりて短命になりせり康安二年
三月彗星出現して天地変異あらはれし事たびたび
又近江の水海も丈ばかりひけるを救しの
不思議あり先白鬚明神の前なる沖よりまから十丈
沈みけるは陰陽の在之なるべし書十二月にそう
橋水の上へり浮かうる康安をわたりて竹生嶋より
三の浦の男ども漕おろして金玉をもてかざる七宝荘厳
何ともしらずあらはれ龍神の往来か希代（ニイタウ）の示現
あらんずるがごとくにして不思議なれば諸人見物
せり我もしらずめでたく思ひて浮る事なり去年
帰るとて当年まで九十年前既百年に二年よ
あまりぬ是いふにまた此家何として長命なるやと問ば
さも人命は敵常なる心あらんなる是表も白居易の
詩よみて里則（シヤウナルトキハ）寿ながし夫人命の
寿命とて死人の二六と命く百八十歳のよはひをた

よ月ゟ見るに海まで流るに身を守らんとす[illegible]
多くいはく養醫術のことをしるして天下の日本の道
をいふ[illegible]の長服にだにすべし寿生をたもちて永く山
年ともに老年まで其身をもつて長寿ゆくし
聖人乃道として左し養生を積ぜば[illegible]延年
の術として[illegible]をもふれば[illegible]一分[illegible]
而[illegible]身にして[illegible]見病の[illegible]
宿食を根[illegible]して遂八邪の[illegible]しかば女人を根
本として南山太師は養教せり寫[illegible]昔
昔の公乃老[illegible]して[illegible]樂は

身の自由をなりて楽天がいはしも[illegible]
公乃安楽[illegible]の[illegible]彭祖が[illegible]
に服薬年て[illegible]一粒の猶[illegible]人間
は病食症醫の[illegible]用は積[illegible]
あつては齢三百年[illegible]長生[illegible]人
至へたり上古の人は[illegible]天地陰陽
のまゝに[illegible]宜しく[illegible]之人
選而[illegible]傷[illegible]傲[illegible]
積ては損[illegible]損[illegible]積[illegible]衰[illegible]衰[illegible]自[illegible]
滋白[illegible]老[illegible]得間[illegible]増

きびしといへり身の養生に至りてハ其理を失ふ
事ハおろそかに[illegible]しきる[illegible]しく[illegible]怠りの
たとへ者ハ大名身分にして[illegible]やむもしれハ又ハ
されバ庸才下輩の人の心得[illegible]平生ハ油断
なく己が身命を宝とし[illegible]儀を直に請[illegible]
いへども治る事なくして潔に修んで井の[illegible]とある事
分にして力の上の費えあらんて雪繁昌[illegible]御用事なる
されバ古人の書にも[illegible]道[illegible]して[illegible]
務身に保[illegible]して[illegible]今に至るまで
先生出生しても若年より式百餘年を保[illegible]何事を申す

らる用心なる事への[illegible]ときられし
吉祥寺門前より茶木佛支をさゝへつる事
見えしハ只大吉祥寺ハ境地花蔵郡にて[illegible]
古跡[illegible]地潤古禅師にて法会世に類なき繁盛
の霊地にしてうけがたき日本[illegible]乃化[illegible]
人倫にあらずたる開居[illegible]霊地山[illegible]なる
上求菩提といひし[illegible]
下化衆生と書[illegible]日本[illegible]の地[illegible]
[illegible]山日光山ならびに筑波山[illegible]富士山箱根
山形[illegible]光の郷[illegible]佛

済ともり渡しみひ月ぬかの光をうけ　茶まハ生
死乃海をわたしくるしき彼岸の行かやゆかバ
むしろ菩薩と地蔵菩薩と見えへいう讃する首をしまき
霊山岩めぐら岩松をはなれて風常楽乃峯まと
なりしる茶の色やむかしハ花かしに植る茶木は生ま
其あり龍の由来より門家の傳とす茶木の起りは
とかきとのとまやつまりと定りなし
日本にハ明恵上人を見て津月初て茶の起乃
茶ハ蒙求とさへ書ところや茶木初なりともある
元是茶始　大師ハ金剛茶の間にゑまし

こへいう未来まもかく傳奇やうとも思ハ記
不思ハ安楽しに先胡椒ゆくやらへ椒も行
来しく中ハ事もあ給ひや神農の御代に大唐に
百薬丹よくかしく文書ぬと集めらる我よまきる
茶し来陳り胡椒の木として多しを生じ茶に
皇后の宮にゑしく是を植椒房室を居住の
物こし皇后の事に椒のをかし温暖し
に悪鬼をさしまいらせ上人間の後病を
茶にも薬として日本国へ渡さるかまきやにも信り
も誰か及まん

有けるに風情之山椒を見て頗るよく其園をもてなされ
ば、此よし本郷よりのくだりや相尋申されしは関白殿
近衛どのゝたうとくおぼしめし公家武家の面々まで
御賞翫あそばされしかば天下こぞりてけん
せんなれどもいふ薬をもちひしよりぞこの名をもて
入たる先は此盛や胃の腑を清月気を消しけるとぞ
これ山の木の名は清しと古記にありけるされば山椒
の木は近年までさかんに茂しめ古はいかに也まで
山椒の盛花はおもしろく目をよろこばしむかし
名薬中せるよし東出もたえなかりし秋の大江

御すなはち中に御座ますとしらせ給ひし文殊の霊夢
なれば山中にも茶を尊き御所ありとて此
勅使はいかばかりか上人を称じ奉るあやしん
と思ひ有しに御聞しき難行しなはしけさてと
いにしへ古用あるべしとぞ御ありけるぞ
かくいう事わきて是まで深勤の仕業先生なり
に伝授せざりけん、されば正月七日と申は人日として人
のはじまる日也、唐土天竺まで我国までも七種
をとりつゝさまざまにいはひなしけるゆへにも
をこなひし万事を祝しける人日七種のさい

どう中に於ても一箇の茶も姜をたつ事なかれ云へ
又生姜清なりといへどもあたゝまりて根本
智乃信を損ず百粒をと嚼ても自性智を悉
かんきやうへしとこぶしを握りて存するがごとし
不惜しらばれいに西はめかむを世界なりと中ハ寸尺
にあらず さつぱりんのまゝ閑生不住月の才なれば至圖
信なきハすたとへものにたとへれ天下は室となし
また宗に○しは黄葉ら色を揚ずる虎黄金とし名付白き
を紅を月中に銀といふ虎に名我題目にあらし ハあく
と古人金を口より摘文ら味をもてんしてあまきを為すれ

専ならし 名付者き 苔参はいふ生紀者に醍醐をい
志は也をめを由念 接待を主宰せハ法量奉仏の霊果
西のつを生するがまゝ井は住たる道常れてとつ
しるしいふいさきろうるのしたやしもせんまにま
似をねこえで面を帰るなけ 弁当かんものらん 能を知
にの事或くやりぬ 敵を愍く虫つきにもぬまたる にとま
名付あるしは然ども散化乃為り気をしとうのそれ
非情字ものハ石相にれの神ゆしめ一塵法界の色紀り之
に雨宮満雨霜のかきをそ知らしいちゝさんもまか 庭にあら
る一切荒生ふかぢはいれあり 御手ハ味れをし 茶本

よ味は背しといへる草木にて味はなしされはこそ
おもてなしは古田利休と云ことりて茶の湯を
れを知る者は人として蓮華菩薩といふ諸義の中にて茶の湯の
名手なりし人は柳は緑と知る人もあらし天空り申
のうちをさへ人は文殊の作り始め田の神は布袋
毘沙門天は毘沙門の天王にて城をベヲシラマナ様にして白井の
妙音天は菩薩として種の時文殊菩薩の時
地蔵菩薩の時は虚空蔵菩薩の時にて普賢菩薩の時
は観世音菩薩一体にて毘沙門天にて持ち給ふ
三宝荒神は今世末世三世の諸仏にて能き味と名

付くは娑婆世界外化なりの根本にて一味
一法なり万法一法にて一味生味にて茶の湯
帰依し十界口さとしなる味として云々
さまを虚空よりは味はひ無きをしたまへ
にかまへて見ゆるやうにしけり自在なる心の染
法の風は紅葉なりけれは心まかせのまにまに染む
古語の心を申し添へ今より一筋よりて
吉祥菩薩にて禅吉祥なりつる御心は
何者ぞや門前の釈迦菩薩文句に聞かし法を
まとめて法もちて書きまてもよりて吉祥なり

禅智識ましませしかはかくのことく給ふ事にさた
白河院の御宇に宗聞てわかくしく興行あり
まゐらせしより万法もしは国にひろまりけり
たゝ一乗の一理をのみ尊まれしかハ三世の利
益をしらす歴代の帝王ハ深く非情草木に
たるまて権実をいはすまことにひとしく仏の
あらはれ大きなる慈悲のあらはれたまひけると
こそいはむかしより仏法をあかめ給ふ事
を悦びたまひけりされば風の末の世乃
ち慈悲にもとつきたまはすといふ事なかりせぬ

江戸大火の始

江戸ノ町屋やきの事

凡そ昔扇谷殿江戸へ討入して其比卑賤百姓
の家一両三ケ所有けるとかやされとも当東はやきまいらする焼
亡忘けしからす慶長六年閏九月二日乃巳の刻駿
河町にて幸五右衛門か家より火もえ出て大焼となり江戸
町一宇ものこらす焼亡す其後荒涼たり町中草ぶき屋
なりしを後年草葺の屋根を禁せられ世間一同に板葺になさる
ましく家船いつき町に植て文にも記す
に滝山に御陣をすゑ給ひて諸国人々家をかまへ
と其御所の所ニ家を建て其後町にまいる

望月青の跋

しは生きたゞ栖のしぼみたるを以て人の法しける
ゑ東明二十日の朝出後隨ひ出まして居ゆく
宿りし南まで帰りしや壱錢の所と人驚かし
ころ無居を半居後に隨ひて是望月寄れ
好みて古今に唐の搖折の花なり此座のごと添
えりて唐の風をもてしてしかも中に何の可もなにしかしかと
まる日の宮の件の後に隨ひ人をも仰せし
事古今是なりしを好む事屆園の宜告
民よりふ若去りて絶えてよしみしら而文まれなるが
黄州竹樓の紀に黄岡の地は竹多し大きなるもの

は椽のごとし竹工是を破りて其節を刳りさりて
用ひて陶瓦に代ふ比屋皆然り其價廉にし
て工省けばなりとかや竹樓の清具をかぞへし夏は急
雨に宜しく瀑布の聲あり冬は密雪に宜しく碎玉
の聲あり琴を鼓すに宜しく琴調和暢なり詩を
詠ずるに宜しく詩韻清絶なり碁を圍むに宜しく
子聲丁々然たり投壺に宜しく矢聲錚々然たり皆
竹樓乃たすくる所なりされば王元之和國を順從
せしより宮を辭して竹居を久しうして是又黄州の
竹樓を學びて茅屋をや然ども家康公興させ給ふ

野地ホンホ

江城の殿守ハ五重高層にして嶋々の上に富士とならひ
雲の上に聳へ人皆是を尊ひしとて西向しなへ
江戸町のこらず人皆尊みをなし万歳と唱へ万歳
まさに前代未聞なりけるとかや人の目をおどろかし
志ける事に及ひし候

江戸河口野地あんごう事

みしかし昔江戸河口ハ渺々として汐さしひき海まて船
をも見られし所先代の頃人力をつけ漸風より
積まれし瀬戸橋をもって舟も豊島の人々の住居と成
なりぬごとし此所ハ民やすく天正十九年の

年始の事なりしハ関東御入国ありし時ハ
是より以前ハかやうの事ハ人多く帰りの際
葦しけり水の流れもさらにまたなく茫々
広き荒野のことくなれハ蒼茫と目しひろき
しられて此所に難波津
なる所にハ佐野記にも又万里新居放鄙
の事にて難波のことくにて津人してまとしやうやう
にも此所にも旧ハ既に浦江に廃
せて水の色もみつし芦間より漂
河内より難波のことく岸と言う柳

なりしかば無念の事を知らしめんとて名
叱りければ拗文無情なる事ともいひければ
さらばとて書斎に忍び入れぬるをしらずして
うけしおもひきしてその海士人かいひ
丹後者ありしが酒を好みしゆゑ人にいはれて名を
ありしが無沙汰にてほどあるに折をうかゞひ
さればかゝる人あれば家のことを語りつるにて
海老よりふしぎに思ひて今やむことも死なん
西にて打ち海へしかばこゝに衣を打捨てゝは
其海の海門より野地をかけしが本より出入無智

今まのあたり足をもちて河豚のやうなりし其居
なき事多かりしとぞ易に積善の家には必余慶あり
とて人をいたはるのみ家しおもふに却て禍多かりし
末代まで源の恵をうけけるこそめでたし家続
老人常に古徳者にならひ人を勧めてし以て法
人をも教へのごとく悪をたに扶け
れば神明仏陀の利生ありて其の家々の末も
ともかれ是人の為にて鬼も却て去るかな
とも知らしもまたしられまじ

将棊盤に迷ひける事

みしか所撰ましくいふに及ハ古て廿首を
一首ものこしたる人（くはしくハ下にみゆ）諸本に
らぬとおもひて集めしき歌を一首以て付しつるハ
まつりごと新に作り事なりし人（こゝろ）の顔の字形を
掲けし例に小袖物品済を書しも志れしもの
甚にも事なりけりしたま賞するもの無名目を
細にしかつ聿言目に因りぬきれ定くけらん
まして言古し（詞に）将棊と縁語し或は
其駒をよは（象）戯ハ或時ハ駒をゐなして人乃
目をたくし同せしもの字に目つて道事なるハ（

駒用ひける竟争しき（名なる者ハ）用しむ盤ハ
其丈ある足音目の将棋としれ其みしれ其丈と
云ふ字いと無しきたれに算（せい）と云ひ部人の帝
其ひし竟をとつ一しおすりしい〳〵よ将棊ハ先本
来の盤目に界を布に毛筆し将棋経の上ミ
其のきまて指手し竟を目すに出されハ碁ハ目に
仰しこ用しかれぬ一おき算ミ〳〵の字
此手にくもって竟を知人（月のこつえしるに〳〵としれぬ
同の中にみつれの上字君ニそのみらいしけ
君王此母ふ包に棋るにも将棊の上手勘弁の人（

將の師とも称し是ハ大切乃法門伴但不傳惣
侍ぞの盲人しくも我かくしらハ我等のくれ
碁盤をも用ずして人王と棋りけるをしいひても
皆人々相違なる書しるしを聲ハ方よりし静
家の月を答よりし動の心とハ答せり甚を古法ゟ
方得を兼ハ答をもし方をハ又文中まよ答方動
敷をもちて北の所をもちしを又問しを打集
其二三行の目より一三をもち打しても其盤をも
也月をうけりも四一を盤をも一両目ハ二行りそれと
つひに勝負て其しも打中斗語をも月ハ初ふ手を

於盲人實にこれ盲目ならざれどもかの碁をうち
くゞりての事ハ方路の場所を得てなをさし別にて置
よりはなるまじ今にてもわざ勝負ありし
其外の先其方目ある時盲人もはゝ迷ひ難敷
目をうたるゝものやうにしてもあれハ盤
なる川の地路をおなじく飛車の所の方をそれに
きゝうらし又善者稽の先をもちて路をもちてさゞ
ちやうと方をもつき路乃打ずしてもさゝあ
又とらん路をとらんは文をしれつ案ぜ
見しきし律のは終らは我盲をかく古目得し盲人

にあひしたる者は将棊には一家角行とさして金銀
取らるる負ぬ信梅子方に人〈は〉や角行をも持て
を勝負して方々につき桂馬をうちかけ取すまいぬ
けふ見えたる人びとのみな角行と金銀も桂馬の
身をも取られさせ給ふか当座あはれと人〈は〉
象戯師是なとの法なる事もなくぬ〈人〉にこれは掛
是用にあらずして〈人〉をもおもひ知りて生を
これ算道の算勘しいひて二つ持てゐたる算
なきしおもひしに〈人〉を勤めしに人ある勘あるし
算には下りて見る所の目二算をとる人に算を段

猿川がうち是非もなし人〈は〉あまた性にて用ひ勤く
実あるは正直の将棋より是は只これをも定を
ことに智と兼ねてなるに算人〈は〉数をしらし動人〈は〉常に
なりまし是をもつて掛なるべしよ将棊は是や
本中の両目三要を流れたる悪しく将棋盤のうちに
なる所をまもり是をも目所に比しられば盤は目に
似たると角より知者にて一物を名付けたりけり
上手是をも勘人〈は〉目のまへにうてる事はなし
月の中なるものめでて君はひとへにあれ
君の代のなかなかに棋ても将棊の上手勤の人〈は〉

此の節も歸依仏法、大和乃法門佛祖に法恩
信仏の貞女しく女もしけらる、我身をしれ
基経を月をさし金を捧げ比をならしいふ事も
此中に相逢ひ不書しく云く経ハ身をしく辯
要ノ月にて守よしく動くを宝ならむ、善く大論に
方行乃光ハ鳥羽ハしはいふ事を宝文々中にハよ学身動
辯なとりしく光の心をあらしく云く文同じく云の基
千二年行く月に一君あり比しくかしく、善言寿
心月を住るや同じく云経是一両月ハ二たりくたて
かく脩基てさて和を常地源にて月ハ我をすりけ

下常

君のうしもからとかたにハ一切身く人間し云く
其心乃二月いつまでを見つるや善く已心の月如来に
同じく云二乗中に二君行く法いつまでつとへん善く
御摂をゝ云ふ貿易二君に津人を間く云えを来一切
あそ女身ひとつ是二星も善く魔王ハ滅却し一位まる
帰をも同じく云邪正一心あらとさまへん滅と蔵善
收伎ハ異なる定めし詩條ともく去ぬ

下常なるうかる事

云しハ前よ危なき給ひハこゝにの常ハ麻布杯の色
天人様々切りの中よりも二つとよりも剣くかぬ事ハ極へ

巳しるよく琵琶にしるし南世ハ下無と号る
ゑりさいへしる萬年へ律しくべし笛竟へ宮
商古へすさ事や何と申ん古く集られの郎よ
下無はとつハかくしもへ三しも頒めかりてまは
ごんしぞ云宮常ハ勝絶ハ同じくしるゐるく
絃へらまじりなくしへよふれくしも文めるく
あらんとほせり調文迷中よ第立と云頭よふく
宮商角道のご井手の下無同じハいづれもく
つらしり何なの家と流とて丹家の云ハ清成く
いふ人大和国井手の里とにとりくにて居よめのく

八の雅ぶつくまてそれるかもくこと雅なりし琵琶
あれハ途へ丸甚しまつるが下無なりし琵琶
ぞれらせんかと女そつらそれぞ琵琶れは習ハさそ
わくぞざりしの如琵琶井手の玉水よ寄せ
桜しもや花ハ大和相模よりいるまるま
よい第十代のまへと云第百下無の琵琶と
こそ伝ゑられて宗祇よりまさり今
八世上豊よく出へ相何しら之林の曲らんし
二あるを継へ間と何琵琶とせりまくまし古へ
こそかくれしまへさる僅相の方よ其の處ぞ

志川とこ常井行違ひて中立くも御とくゐ
ましき事しもら勝しと常ハ思ふ人にお游ふしるへ
術識常ない人の常ほども記書り一言に行違ひ
に今こ而る游きり記しる常しとく康處的神
の家るに男女等に能り せい宴 いかに 常井常に
名に書付神前に立しけしは神のれをいへる
事はしの後わり 古ゐに東後の後のあて
なる後陰常のうぶしたるあもりんのこし
おもしろしある掲まして常に嫌雲處寝にて麻
芸り山まいりせしは常女子に夜とかし游びし

こ居て来ぬらん 又済し康寂等の出常しを
しれぬされハ自世之此ゐの人にもはしん中に編る
なや志し欠掛のかし記へ田地へも記ひ後ゝまきう
篠へ跡まへ上し後いろし 片縁ひとしらん
前へもしさげ派ぬはいうらそこ 様のよりげ
服飛味人はこに縁尾の之心近来あまた
石へゐりて古人のもはけ人也がしきハ記して
為きハくにいあの私ハ果報の禍かもまゆは何う
の事かまう人乃乃盛へしはもて用る在に不るへ
ゐりとまし玉のとうところかまそゝ是とも流へ入るとて

多數のまて悔とさけるまゝにて世中なれし

心くるしき老人見て いかにしやしく僕ゆかしき

事しは言葉して上の字よふかれ行あかし

然し大名の中に見ゆるは小田原の法度

北条氏事にて 後北條相備と申す後さくへ見

なくらし前北条毛さいしくは外にありてさるく新法

はしめは所領の知行と皆記家に入候事

其の時代天下太平にして所にさ皆に入たまひと

翁り法度の風俗の第一にして

事前代未聞年月を經て

慶長法度書

今しかど 相模の早雲の孫氏綱

しも秘まししてさくへきとの

後家に請候て

凡箇年の法度は御出に

此事若は不分別 一 白綾白小袖

の後家の裏袖の小袖御免

用ゆへに氏政前北条相備

法は知しま見えて

候て法度

あしへ見て

ら筆めてあつて後漢に蔡邕鍾繇なとありて
顆錄之式傳流は能書也後漢書を見るに後漢書以前之
叡之ずしれる所に華夏の事しれずとおもふ
此人は王羲之なと小野の朝臣小野道風卿
忠常は清原の家に有て筆のたしなみあり
能筆の力はすへて後の人の所為也といへは武藤角くら
力あつくして後筆の小野の筆をきはめしに法性寺
後は何もすへ此國をとやかく云はぬる者
やかの見る書後亢肥後前守なり其書は清高き
ものは武士にして不謂不隱なる能筆となりしに
うしろ能書　名は後成寺兼良公御筆は富貴なし
時らは後京極の筆を信し是を執筆の時
後も扶持せしめ勅印なとし侍りし給はん
其の書を似せて可知也てけ栃家あるして仰
給ふれは倭語の詩傳魂を伝へし古き文は後く
天智院の御あまた有りて知まれて國を
出てそれよしも先祖をあらはし云ふ其の
神くは草書を好まれは草本の後と見る
みてるは唐ともさらは志をしめたてよる猶さ
其後り書も知らぬ者振舞ひとつかへしも会

什ゐよのほかなることなり　たゞしるをかへん人へはこたへ減
の道人へしらしむ歴々しき於程の人へまゐら

人の振舞嗜り候へき事

凡しんぞの為宗匠の言は日月のさためなき如く生死を
旦暮にかはりし色の着呼はとりあへず人へしるしと無常の
風情にあたらしくて見せんかと捨身なれば生身の
きかうし色界の浮句に隣の親をも床落し居
是ゟ何しせよとしも実に津浦なり　歯文は月
あげよりつかりもうせてみまに後の世としりて事
人のあらんとも法師ゟ濫し字をも限なき
思ひあまり物にも嘴にやくて歳をいかゞしたがよかるべき
亜元里よわれし津よ色かよ珠情の身もしらず
かし人の出入のこゝにしも忠たくも例の振舞なる
せうかくも色へ人文殊も同じしるや傳る遍照
色を多年の情のいしはつかげよもぢし城居しても
家ほよ人しさかゞよの事よおぼしく見間しも
まじき女の多くくらん人へと誠せまじ実
人を関わりさる代業しもしれて多ほとも
乃なる目としとて津よおかる形の振舞あしいる
まして人は縁にても礼儀と周り立そのもよ

煙草

ならひしにもてあそひてなくなりて後將しにも楽に
こといはしめて見え[illegible]ともをかしけれはつく
[illegible]名被[illegible]て[illegible]もさ[illegible]鏡の[illegible]ん
見えくてさしれ[illegible]みし侍しぬ人[illegible]
[illegible]の筆[illegible]にも[illegible]神仏にもやらん
[illegible]らん

煙草并烟のむ事

みしかくなしとていふ事近年南蛮より渡り
売る男女共に火をつけ烟をのみそめしは江
戸の道安といふ者なりとそ申しつたへたり[illegible]

あるひ煙草をのみけれはむせかへりて[illegible]
はきけし[illegible]の葉をかみて間へは道安[illegible]首[illegible]
[illegible]薬[illegible]いて甚烟を[illegible]香[illegible]
[illegible]の人[illegible]とて[illegible]名
[illegible]人[illegible]久[illegible]屋[illegible]
[illegible]花[illegible]煙の
[illegible]
[illegible]時[illegible]
[illegible]七日[illegible]
[illegible]葉[illegible]葉[illegible]

毒ともしらざれは典薬頭を始以下まで
のこらぬ事世にゆりそのたれは薬を見も見
有月なるし返薬を是の事なるにて論術に
薬なくのちにも補なき猶しいて松是
さん終にやまひを癒す事もあらじ
又いはくなにんのことく神農本に
千草をなめて其之味はいを知りて人の世の為に
なしたまひぬるよりきはめて代々の始なりてと
云薬をし菜の草木種々を植て世にしる薬種つけ
たれたり此国日本粟穀を地よりしたる大事り
此大事に及ばしといへども蓋世一の国と
いはるゝはしも文武のふたつは唐土の他国まで
超えし後も御開きをなされて上古より当代の名
医諸家流書各流荘盛探治療延寿流探りて
た専にして見とし薬師の変化して治法せしめ
いたせむしく新草をとり病を去らんとすれば其の事へ治
存し侍

道術日夜双紙を書しるす事

見しるへき人今の世に先人の記しるしを残し
火の下に文をしるしけるを好むの人にて申し

きなるべし　あしく時節にかゝはらずさてさてよし
されば若き人とてもかくあらざらんは是
猶もさらに文ある甚しき是の学問に
さのみ打捨て来ましく[illegible]の[illegible]しるべきなり
比は孔子も十五にして学に志す人とし[illegible]
よき年にてさしも[illegible]聖人なりしよりまさる
ものも老いぬれば其身も[illegible]しれたる[illegible]
しかれども世中よし時節の過ゆきて学をはじめなば
なにごとにもならずして是にてもなしかくもあるべし
あれども学文せざるはいかにせん文選十九首の詩に生年不
満百常懐千歳の憂をいだくといへり昼短苦夜長何不
秉燭遊といへるを東坡は夜遊と云ふてよ
いふべし百年にして是に同じ中にも七十余
の人の終夜をはかりしらず古の賢者も皆同じ
年の比に百年の中に楽あり年老ぬれば閑なる事
もなき様にてそれより書をも面白く昔はさまで遠しと
思はれざりしを文などとき
て読たる人の世を経て又出しき漢
の蒙筌などを相伝して学ぶもの是
古流行して面白くぞ覚ゆる所の[illegible]

る事甚実のなる事也小寒先生の編之讀ニ曰なれ
曙より白髪の日まで修して初よりして因なしふ者は
日々出て先乃やかしき事を学ぶ者を折にしたるに
孔子の云く孔子も四十五十にして聞事なくんば
是もまた畏るゝに足らずといへり其上朱先生
七十にして始て学を好し名を天下に揚たり曽子の田
荀子も五十にして始て遊学を好しなり
し碩儒と成て錦を衣て帰ると言ふ名を死しても可遺
此等これしき道は華語胡としてし商人男色
の三史代文をよくし学者となりける文三乃楽
三河の梅文字の今井かなりしれも雪
其昔より学はしれ有る年のかすくしらす漸付
京に居て人事して七十五年来帰し之名を得
思ひ出るを枝葉に七十に成ていよいよ
杏子の八十まで餘年を思ひて此心のまに句也
下り世に念ひ乞て同しくいふ人の所は
事は那須の湯を去りて是を道の所の名人
同しふいひたるかにするかしてやよろしくみ先
人のおしき湯の家人は十年余のうく重句をと
常に心よく楽しみて是れ一生涯の事今もと

漢土にも三十年間
専ら梅を賞し
まつりしも
寛永年間にハ
梅を謌に詠人
数しけれとも
古言論にいふ
言ふことなし

おもしろき色にも世にあへる月なる筆味ハなし
しかハあれと楽しも見あまたあかしかたし又
花裏道人 とよしへける
にハしいてに庭に植おくものにいふもしらしく又
世にも楳の川図さえあらしかしいほのあられたる楳
草木にも雲井文事あり楳にいへらん図あられぬ楳
こしハ其名多し世月尾の楳蘭楳又つゝまに山楳八
みしも楳の楳に山楳八尾楳保ちし楳いつまも
古今よりへうらいつゝみつくし楳つくり
これにもいかぬとしれとるれにとあらしに

保ちし楳の世月に多くよ詠せる当世歌人の好
こなたハ白梅の紅梅に紅梅ハ早春めて植るも
白も楳中らへて詠せらされハ当年の春白
き花の咲し又楳一本おまへし賞人にいふ所雨
歌所に詠し侍らんハ人皆は後の事那にかし
紅白も楳代賞して是を後に続ハ後の何かにも
しかも梅の庭に植る高梅をされハ世にしかも
さあつきおしまさあるにそれかりけたる花ハ花草
咲かさる木のり白梅たえく咲かし付くらしたるに
又たあいある事もれ雲さへし花の草実を詠

工こそ花實共に円かなれば又持つ宗
りんとして手本とも成也殊にさればこそ人に是を
のがれざるべしとて人よくいましめて縄をも
よく守り不實に流れて道ある人よきものゝ集の
正直にして人に是を学びて花の香を勘しらべて
まことに花實ある道人の流れも花も道人のかれば
こゝに世の中の人よしあしの物事をよく分て花實道人
なくば實も無き花の香道人のみ云はれける
形にばかり見る世の中の様なる事也と云 掬
水ヲ月在リ手ニ弄ベ花ヲ香滿ツ衣ニと古人もいへりけり歌人
は無ぞにかゝりぬ来る山風に花散り花道人
の花よりも人の為には思ふに寒けき春の實のなきは 掬
水なればこそ月の影見えぬるぞみ花のと春をもて
花の香をぬすむもいつまでも月花のごとく心得
花見る人も道人の流れを見るべきなり

醫識法印の事

見しは至徳の頃薬師法印にて法印に
信仰の深き御方にもありけれどもしげく御神に
参る人足遠かりしは医は仁術にてひと徳あるべく
三信ずれば其信をもなし人は實なきは医

俗生にて俗人は
出家は道なるか

賤俗にしいふ無人のを非して俗生なる後世風流迄も
おもしとし悪を悪しる人も宜しくこゝろ宗なり
新う威風を非しかへし宗の首尾の人中されれ
りき〻當世の人にてゆくつく人の世にてみる事に己萬ある
師世人乃とふ根本是のありけるも知しも敬
常売繁昌茂よう弥あらしかふずかるべき也よ
仁義の道を志しては仁のたふくして人もこれしから
あしては人のはらかしけふ仁の道をかくれは
て後人をなしたまふる事を宜りてそうし萬つまく
給へんしくよりしくにるもよりて當人へ信派き

故すさらばなる大義理思ひしは萬をもかふらうそこ宗
それを成りしは王法に位り成しかふしては下位まで王
ころなき于りには関寄するに入ためいとしいふし質
又此りあたざれば自らいふふ事をむしたかうて
位をもたばるにも非しむふにをかしてすゝる所位
大めのとしも諂ふあるかくれる気念愚に心としく
世にりすゝまでてあるなかまれ従がいしきまるにあや
されしとも己達をえんと致せばまつともを至をきは
出もと光指をもやまれてしかのきうしてけのそふは清
敬かいふしたのきてしらし顧はなとらし

仁義をまもりて事とし邪なる心なくして物をあはれむ人
これ富りきれはへたて高位のものまて[illegible]
むかしもろこしの人ハ文才徳ある人をえらひ軍籍をおさむる人
しろしめすはかりこと[illegible]是[illegible]公家武
家倍出ともに信をもつてのふ金銀をもつて[illegible]
かくし古きに[illegible]人の心も[illegible]
（富）出しちやうしく人の歌をあつめ[illegible]これも漢
書より信のこともけるといふ[illegible]画の[illegible]
[illegible]
いにしへの[illegible]一女二男をさしおきて天暦[illegible]

このうちにこれ人々と[illegible]男の
数十九億九万四千八百廿八人女の数廿九億四千八百廿
人とそ申されける[illegible]中にも[illegible]
きこえ[illegible]
[illegible]
[illegible]
古人[illegible]手[illegible]中納言[illegible]
[illegible]源[illegible]
[illegible]
[illegible]源氏[illegible]

まかりしぬ 然るに由来年月わかちもせしほどに三ケ
須磨の此頃に此浦へ流されし行平つれ／＼しあまかまよ
の事ニ日をくらししほくみのあまの浦ちかきが
めんなるに詠じさせ給ひし朝夕の名残なく
せしに帰京有て後は右路大納言なりし也
古上天皇をかくのごとく此たのしひとかへりける
信仰も流れしみかぐら人家の名残
私かしこく仏も流転は業輪といふなるべし
まゐらせしといふ三世にて流転の勢を以て流
生業輪の因縁をあかしけり大集経の十二因縁
の流れて深淵の中に来り不断の煩悩嬉傳乃
中に来りしといへる前世の業の縁によりて
迷ひし今文にも書るゝにも自他ともにしらしく
下然の所にも古歌にいはれしといへり案
江水の月橋にいたるまでの事
流れしとて江水の細き流れのごとく一筋に
此水神田山崎の御京よりいで来る慶長十一年春
仍此流の意にて平ひさしく青柳の来るといへるもの
流れしに発句にもせしれ宝句白ら旧海
しき時代にいへり詩人宗人其流を流れ世にあるべし

楊巨源か詩に水辺の楊柳麹塵ノ絲立テ馬ヲ煩シテ君ヲ折
一枝ヲ たゞ春風の最相惜ム有テ 慇懃（インギン）更ニ向中ニ吹と
いへり 此詩を以て柳は[illegible]せんとして枝をたれ
春風吹も此中ん わがすむ中へ[illegible]吹来るは緑
[illegible]も朱にまさり[illegible]やかなれば此水御城
堀のめぐりや流れて此中へ[illegible]この流に柳あり
[illegible]これにも[illegible]も[illegible]名もなき
橋とも言たぞ 家康公御東入の後御用
前まても[illegible]いふ[illegible]物商人の居入候
へ[illegible]是より[illegible]雉子の

雉子橋

一ツ橋（ともいふ）

[illegible]の二橋

大橋（[illegible]）

[illegible]好みありし此所の流に雉子城あり内にあ
[illegible]此流の水にて多く雉子を飼置れ
入置よ其雉子を取扱ふにぞ橋一つ掛られ
此雉子橋と名付られ又平川の先に一つ橋
あり 橋名もひとつ橋と云つき橋とも
いへるは 此所に[illegible]橋して渡しけれ
橋あり 是はもとの二橋とも名付あり[illegible]
の大なる[illegible]橋一ツ所へ有りて其の橋も大きなる
[illegible]橋と是は大橋と名付しと 町と云ふ本町
にて日本橋[illegible]橋[illegible]一ツ是は[illegible]

の橋ハ文禄四年の大雨の洪水に流れしより小橋と成
堀川に水染京流折々しるしきしと見侍
乃至は卅條あたり町の南に代官板倉周防守
表橋小刑部殿にさしかゝりし此橋を隔あ橋し
名付し其後へしかしもくハ昔村里しきを
流堀川にかゝり今も鷺森橋かゝりありけれ
昔のたかき橋も名のミ残りて名をとゝめて
橋も又まのまゝの婦の言葉の末をもちて今ハ東
西南小の町より大河文くは東ハ松の昔堀川より
橋あかきしせしく出来る水底にハ海しまた卅川よ

またゆくく人のいふことを聞て一人の法師
のちの世に東洞院より左に引分流る
侍る毎に昔ハ堀川の末を阿弥陀かくは
一行条をしもとゐるとて先の河原を見て
人の名を書まて書くことしてこゝに是那る人
云人今ハ山の橋の辺にして事橋ハく桐
打ぬよ翔のごとくしておかしくしてこそ橋の
名をもめのゝかるへぬしくいつの頃よりかたりかゝり
いたの橋の下長くみ橋となる唐橋を山城の
名をし肉橋とのうけ橋とは林中の事しかるや　古

一首よわくともさまよもあれば営の本体わすれ
天の橋こし渡れど宇治橋瀬田長ゝし唐橋細
橋なども いづれも思ひしほるつも中さしま名へと
いふ名人にしいや四条の橋の名もなくはなしとぞ
首の橋の名も一つとしも本橋行橋中橋堀江橋
皆これ名におもしろきしのみよりも舟橋の名ぞ江
之の桃よりも来れば詩人さへなかなか此橋や
筋なかるなかるに去之中来あるかや橋の
是在名しきしやき橋を伊勢のあのおとこ書なし
いかりわくちからや大宮（やき）の橋をのびしまうま

橋ぬけ物のつきまさぬ此方橋乃いつまでもうき名は村毎
世なりと思ふらん村ゝにく橋更物はこうらえどし
紀乃玉乃さしき新あく人をいかぬ村まで和気の
くしてるも涙き橋渡はありなれゆへ玉申つゝさへく
さらにはりまたしるふところそさきの橋屋の橋
鉄中にわたるの橋の見えはなかりけれはおそろく
しとるまでわれしきまで橋とは元のさにて千
楽の橋のといふ名へてそのさま御綱の橋も志しはぞ
ふくらち橋須磨くしてなかつきさんとていふ事は
名来須乃橋を色しく由を打来橋更剣にとに

まかりいぬれハ縁ある橋の其名をつくし難しされ
ハ橋の徳義をいハ仏法世法に多くきこえたれハ
橋ハ般若菩薩の形をあらはして又ハ衆生
いかにも彼岸へわたさるへきとき法華経七の巻に如渡得船と
あるも此法のミ経の中に衆生迷倒の大河
を越して彼の岸にいたらしめんための船橋
なりと説り実に此彼の郷にもあれ万民しるか
世ハ上古より今にいたるまで是橋の功徳を挙けて川に
橋なくんハ幾千万人川のこなたにてあそひしいたづら
に命をうしなひなん必定なりされハ橋のいとく

日本橋

天竺橋
今の一石橋也

あらはれけり先年江戸大普請の時日本中の人
集りてかけたる橋なれハ是を日本橋と名付たり
又其川下に高き橋あり是を天竺橋と
名付しハ是等の橋ハ御代目出度時なれハ新規なり
出来するなれハいつまでも名高き橋ハ末永く形なり
東海にてハ魚貝ハあまたあれとも
見えしハ相模安房上総下総武蔵此五ケ国の中
にし大きなる入海あり海の渚の浦にも是を大宝とし
此入海伊勢海とも知られ集まる人を関東の海
七ケ国の名を知しれ浜辺の魚を小網にて出し

斗え然るに今我邪見無道にて西方の海を悉
冥途へ来り業実ハよろし那らり華り地獄網
とらふ大網に懸り網の目の溜まり二人し打程の
成ると二つくまたまり足もと千里なし光月二つ筋縄を
つけ井らへ渡し二三千年の末まてつなしおけし
大網の本ハ千里も二千里も引く御殿とらふ末実の目
まへりなりし云ふ事の一破りに此又ふ人か七破まれ
宗大海へおこし網とつけ南方へ三破り引つく
大泥をと川破いたしつり出しと落網本まて走く
在右の網のさし引しが網の内に引つる大実小忍一

白當作開

法も剣へきる事仏のは海底の方にてそ出る悪
川に引かれし海底をおり貝や銭みる人よくく泥を
海へ向ひし大泥をと引しつて丹乃内にまよひ車を
伏升破をおし閣と問ひけれど禍玉ハ座し行にも
始らくの間よりも代絶えまよく川の中にすて化せ白
ふう閣来の一くはまた度々ら海底の大実所座乃
貝ゑたまり行くま程ま晃屋とかれし陰の上座井
上まおそる実見とも今ハ明らか初しれど苦まり勝し
然もてし深くまことに初実初実の法花を申しとし中
まつ又つ年ハ外の方地獄網まて有さしぬまさハ今く

十の内一つも形も数留湊池に入らんば実に鋳勝く
金を盗みしくは玄宗の玄奘へ申しに浜田子よ
流れ落ちて其形じ時世の奇あらくしく今
もなくはおもしろくさらにおもしろく妙音の中にも
面白鋼鐘にして来ておりれ玉をならしく南の中に鐘
なりけり多田の三宝の浦に海士乃社と申す所
家の流れを物文乃まで操乃浦の桜鋼はしめ鋳
こよりはやまりもんとくしめし櫻鋼と名付まり
用ひし事はいかにもありし記録をさだめは無し
其に曰く西殿は東海へ来り伊豆の積迄

の海に釣ありし初鋳常観二小田原小米家の時代ヱ
来りし失なく曾我ひ中むしろ鐘を鋳貢すよ
かつてとくしく古き文には紀しるん例ならしくびく
侍氏門出し酒者聲と共に用ひ浮ひねさびい
味ひいけるはじまる北は井家あるういち待気名聞ゆま
当国は大すそもさびしく鐘のひきす丸目しゃ之見ゆ
其之くとくしく往ほうありしま本居上事浜には世能き海人
鐘と伝ふるとく海門にしくしつ鐘まある世ある所
こくきましも数き家ま其もしとつい内
是もひこそしく壊ゝ[illegible]申文字の内に加笑

者ハコトイヘハ
寺ニ手間マテ
用ニ調シテ

書行しを揮く婦し雅楽と絵師之北小野の山
之人行きし人特有寛宝年出来の国の人賞翫作る
事しきられし類つるし古きよ至りまて打遊びの
浦遊井の周紀の海に添ひて其国の南平の人形賞
翫し来て是あり庭別に其子生死また朝雛とも云
あまたありて書おし 狩文清香よい雛の内千種の公
作りし絵を美麗にせし初しれ深きも美味
加飛よ今の時代しをに錦を雛も 滋味
けりたりしし皆人賞翫あ手あ方民様に作り
人の好むなる時代などしうふりしことそとてしけれ

一 雛なと持て来るさる関東にもありしものとし
昔よりしもそのかたちものの世にある生もの見る
為して其国より持来る清見ゑとてくるめと
見るには川岸に昔ありし其雛初雛と皆人賞
翫し給ひ寛永の頃より雛を立川雛といふ[illegible]
是は享保年中京都上京の者の作り出せる雛と川
雛類の近き頃雛屋の国の[illegible]
次郎左衛門一つ雛今何代の筆にわたしてさし
後の十年も記より人形も作るに初雛ハ十年以前に
京都中より出しことハ世のさしてめずらしきゆゑ

初鰹一喉ハ金子弐両あるひハ三両乃あらそひするもの
あまたにして一尾千金を費す一刻
にかへんハ初鰹一喉價を重んするやいかんそも
大海のうち魚多かりといへとも西の海七浦を関東
万民のうまきといひしと称へハ都人金のやう地獄網よ
はしれたもひ出て花房伊豆の浦に浪深
安房の海を渡して人足乃魚をとらしんの為
ましくて役所ハさるた三界の群を捕網のとり中まて
少しの多役なれハ今世地獄網して海中のこらす
まもち花ミさんのかのも女までもなひきし押文

弋猟といふ事行ハ弋といふハ弓にしても矢のさき
に網を付て鳥をいるも猟を称するなり漁猟
ハ釣によれる網とも弋によらす扁鳥を射ましくて
仮語にとらまへて魚をとらしくも大網をうつしことく
方斬をよくなりといふまし魚をとりて弋よるといふ射
る事くみ魚を花とるんとりあへす射とるもとも宿
魚をと射るハ情なきよし世俗にも魚を獲網のを釣す
のたれなとし云家をよりて矢をも猟として為ハ屋せ
よしとて家を漁つけて取まてり黄武人の浅瀬にて猟
池のうちにありて魚をとりて大海へもやられ中るた

もなし、めでたき形を結び給ふとも
勝るる大山よりひし〳〵しかれば草堂を作る人集り頼
人々悦びて勝れ思ひけりされば去年の夏を
江戸海山川まで多人の用かなふ人有けれし
くらべしと云ふ仏はおの〳〵念仏数十悪遁の時
いましめの十戒をたもち心にまもるつゝ尊とや
むつかしくん海士のしわざは網の目しらしめ
打殺して大殺生言語に絶たり

見聞集巻壱終

見聞集巻之二

善に悪識ある事

みしは今、信濃国善光寺と云浄土宗の寺に安置
より浄蔵と云しは浄土人念仏するまで切々来りし
者云ふは廿年難行苦行萬行を致す阿
弥陀念仏の肝胆と観じ修行速に三十年の
十月十五日是に如何して速に成仏極楽を望み
極楽へ往生せん事を思ひしめて猶遅
中しかるに臨終に念仏をとなへしより梅
知る人も遅くしい此世を信し来世をそこ

忽あらぬしいと見しにも婦人のごとく浄土
しる人に居りつゝ申されるにいとをかしと
くだり給ふがまれにしいま出されてきりて
初めつゝたゞしく云々を候ひ我人のしも有る事も
有子に建久六年五月廿日鎌倉由井ヶ浦の辺
に漁夫病みて鰐死するを生の理知らしく
諸人出でゝ見たるに螺貝がつけりにて
さしすまに動揺させ生しけるがごとし然
朝に漸く出で後の後ち梶原三郎兵衛尉
義盛より尋ねて命する曽我兄弟

ける海原より此をまうでたり又あらたにし京
深浅の名ありといふことなりけるも其
中にも文永二年九月二日熊谷小次郎直
家鎌倉にありて足立父直実入道蓮生坊
十四日に京東山の林庵にて往生をとげけるよし
告ありしかば其の閑を見てゝかんとんが為めに出
立けるが此の宿の路より御所中へ披露せ
べきもののかは侍して鎌倉中に沙汰ありける
披露せられ奉行の人々法体にもなりけれ
同時に前司広元にて筆を取り初めるを以て施

の前に行しけるは、うたかひなく往生すへきよし申

彼入道は世を厭ての後は往生浄土をねかひて念仏

頼朝卿にしく種々にいひて往生すへきよし

云ひふらし十月五日東大寺の騒乱に京都より鎌倉

帰参の刻御所にて道中の事とも納しけれ

は、法然か房之乗願上人申ければ、熊谷（次郎）直実入道

去九月十四日の未乃刻よりもしく上品上生（往）の往

しるしをあらはし北嵯峨にむかひて京中緇素

の往生山の草庵に群集囲繞して見聞の刻

直実入道念仏の声と共に見聞の耳を驚かし

しるしかはらさりしと念仏とゝもに（往）寂す

え申され（出カ）は筆をもつて書かれけるを東陽房

記せし般若を念して種々の御許しあらは

様をとひし浄土を願ひ一心に念仏申して

しるしありしかは、中将実成しくと

いひ出しく三年の月日をへたる年八月十三日

十四日の未の刻には正念に住して死日をとかくや

未来の事を思ひ、無上菩提の願をこそ

願ひし生死海を渡りて弥陀の浄土へ

と正念に住して死せられしかは念仏しく

此在所は山本宗安と申しゝ人の頼もなく山居

りし女房子は後生の[illegible]さず[illegible]及ばれぬ流

しやうじの日数をへて[illegible]明暮[illegible]夫の忘れ形見

に残し置し子法花の経よみ経をかん

事[illegible]いかに立よりて[illegible]

[illegible]首をくゝりて海へ飛込みけり

し稚子が見付[illegible]角も死なざる

[illegible]後の世の度も[illegible]中

[illegible]明日[illegible]

に極楽へ[illegible]丈夫[illegible]の[illegible]

こゝろのそこはゆめ（如）まぼろし（夢幻）あは（泡）かげ（影）[illegible]如電と[illegible]

も涙[illegible]中[illegible]念仏[illegible]文中[illegible]

見えて医師[illegible]是は[illegible]の病

されば薬[illegible]の[illegible]首[illegible]こそ

おのれと[illegible]魚の命を殺し[illegible]の[illegible]

なしの[illegible]遊[illegible]の[illegible]の[illegible]

根[illegible]極楽[illegible]中[illegible]や菩提[illegible]

之[illegible]阿弥陀[illegible]つまさる[illegible]足[illegible]

行[illegible]川へ飛[illegible]

うき世[illegible]年[illegible]（虚）[illegible]岩[illegible]ゆめ[illegible]

一 女房子供大あかりまいらせ候へはしと
さまたけなくやすらかにまてに出離生き
く足ともおもはれよしや地獄の使なる弥
陀の誓願をたのもしく阿弥陀のきまうどんり
てられとも鉢山土居へつゝ流れてへ人しこそ
安楽は弥陀をまうしけ極楽にし安楽国に生れん中く
あし屋安りなしとやされ人身何かにし
事業をたのみこえてとも終のときの
しかるに浄土のほうひとつに一生悪業をもせずしぬ
ちり果たびとして生死の海にしずみなん

六度罪業のいかにかさなりとも能之とも安生
海ふ一念弥陀仏即滅無量罪と説給ふ文法然
上人の詞には往生極楽の為には南無阿弥
陀仏と申て疑なく往生するぞと思とりて
申外に別の子細は候はず此外に奥深き事を
存せは二尊のあはれみにはつれ本願にもれ
候へし念仏を信せん人はたとひ一代の法をよく〳〵
学すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入
道の無智のともからに同しくして智者の振
舞をせずしてたゞ一向念仏すべしとのことは

是則家居のまゝしきうつハ半隠居の生死
のつきさえ来達門様朋の継をうけてけひおもしき
いふ十月十四日の給ひ十あまり中也ゑめまじく正気の
家大宗もしらぬ浄土宗の阿弥陀家をうつし来と
しせらし人よのみつて雲をしるひたかきまゝ
とかくさせ男んしもしの正気しくころ
気任ちと思んそうかを辞半しるす大継をとりし
ぐらい筆こそしてしかし家の中に豊紙
元禄群集し礼の生命かならで候にぞん
す人萬する公成なりし物ゝまちとも

平太郎形気男ぶりの事

それしかし今江戸繁昌にして花麗にして風義を
小笠原か萬代末家なれば田舎人入稽を
専らとんじまゝ則手をそゝり当世柳は平太郎
とりて色様ある人これ形者つゝしく思ひ
当時今江戸町人の風俗は是を以てわけ
見れば田舎者そしりていとゞ家持ずし
家にてはいつも田舎者とおそれあれ能
うしろにはものしく髪ひげもさうしくそえ
はせても頭巾を目のふまじく同じてつゞけてほど

古小袖の売りとたのまれて衣紋つくろひ出
縮緬乃よごれなるをもおとす所ありて
小紋縫殺をはゆへけず顔目をよし並べ人毎
棚にかざりおきいつはりてもおしらぬ
人の足をとめるも古き文も庭縁をたしかに着せ
まづ見せかける忠義坊思ひ着ハまづ目出度しよきを
いへるみしこれに手前御が作りたての
首尾あれこそ世人の中にそまし着きさまと
ころりきぬはいふ事をおもふ田舎人へ行なんと
思ひしに帰るさに五郎のに中げ物をとりかへして

室町のとんめがうりはふかうに中の相文庫衣桁
蒔絵もうるさきじんちきんらんよしきいろ
くはしの硯箱なる掛ものとつくらさきよふ
あんざし寄る人もうつかたしば衣にはもとの
手御用と出る田舎者の事なるにれだまつ
し顔かくぬるんとひきまん事はおい
もしばらくの方のとばゆるかへまうけ勝代
くらめ法花以へし頼へし柳乃前と定る
行半よし立しぎまかあいぶ母まり笑なしと
まげ足るる棚にもじまだまとつゆがら法花

郎ひとりまきに人くまうふに一人よき女房なる女
風情は秋草が里乃よそぶりにして此男にましく
似もせぬ姿して物をかくさずいふきゝて思ひ
是なるまゝ女もともめの似合なり様をいふ
はじめよりしとに今も昔物語をいひし年
ともに添はなりけれ共口ともあき秘を
年ごとに悋気して文なとして口目もなし
なる田舎者是非見て口さ神も出もなる姿
なだ月まさりふご者也けり中にもたゞひとりの
撫まはしの足まてなる若衆様のまゝにうらみなり
年の方へ口をよせてさゝやくいつぞ様と初のい
是まで紫小袖一重をぬひくらせたし物ご貰
おもしろきことなれは田舎ものゝかたるにぞ
思ひこみけるに行し出合にも二番まで心よきに
座敷にひとり年のとし西のかたへ文ひとつ顔目
なくされる田舎者是非にも顔に言葉も云しき
二番ありしは浦にて耳ぎきつぎ影やかれ
さらに中にも只ひ物こそなましいとしもしていまれ
はしくは後悔のかのこ只ひとつゝきて命
顔男の女も一目見しとこそ人ものの物あそびさてたる

誰も侍らしと此程より男同志になりき
其月二三度芝居へおもむきけるいつしか今は
芝居見たき人も二三人あつまりてともにさして浮世之
あらましを世界の左右男女の見物させて家々
行けるがいかゞありしより中に出家の僧一の宮
よ鏡のしたに人あまた中の家に行しもしても御は
出家のうちにも中にも侍る人のやうなるを
みえおのれにしも中にも山家の人は
此事をきゝて一貫目をかへし二貫
大利とて又一貫目の利は御神仏のいまし

ともあれ人はたゞ倍々にかり地獄にもなく
鬼の世にもなき事と思ひしれば是年々増も
此中にかくても浮世の出家の心
一貫目の賣ありて錢五十の利あれはとしも二貫
の小袖り錢百文の利にまでとゞまりて其日のに
そもしるもの世の中利得と人
前にしれし是へば一日中にてありせん浄
土へ参りし事又出家にもあら人
もその作る過任にて悪あるものゝ娘
子ゆり細へくらせや頼もしき事なりと従

ゆゑ王子にハ其まゝにてまさしかりける事ハ

本をるあされバまんざらはじめ事もなく代々二葉

いかにされどもおぬしまさ人もある人分れ後と

の知る人も成べし人として運くこと馬よく安く

こゝろしらるんぞ年れ月にしに文も自ら来りた人

こまかくへきはきる事二番文にゆけば学し

こゝろかのみもちるしき字あやしがたがふ

いつ有徳るをされバ人の名乃がいはしきるかぶ

常にもしおもしく用氏文集月ころへ身を向ふあ

らこ成るがうつし畫ともしきおもけさしいよしくのこと

しいうんとかまは知るまへしげるとて星離

陽に傳ふひとしれなる人とするにまし事

いうんしつれぬしく譜ものゝにえもし

あ気虎朋にてこひとて人深くえんずしるう

知しぬ人よく正事るしたる中よ見しまでした本

古き文字星言ある事

定しや今の世ある人云るハ和漢年運と號し日本

まて人皇神武より孝文天十六年迄の文字

年数世間のことを録したる事までも

思りけ絶てう稱号と見ゆるハ孝文天平年十二月

十七日南海八丈島とて大山一つ見ゆる。是を今を
ふ山は何しき島にしんにふ　近年ハ八丈島
渡海もありし此島紙等ハ一冊ありしこと
いへる津にも有しぬ越に居る者の在ことも
云伝へし由文日本幸軍別の鎌倉海草木田細村
里の事近もなきなる人ありし知りし記しある文
ありき内に伊豆の國にて三郎氏所大島に流され
し紀せり是よ一つ乃お遠あり至所の海また大島
並島にて鎮西八郎為朝ぞ居給ひし八丈島と
名付て是を寛九ヶ所の人里多しとかいへり

蛭島といふ所ハ北條に有ハ小一お相模に流罪の
の公義に波勝鎮西一種と名のりし鎮西八郎
為朝右兵衛佐頼朝をハ今にたかけ大島へ流罪
せられし所にて日本の絵にも伝え是に知
給ひし右の公物に有ありける為朝とハ
保元ノ大島へ流されけるに嘉應二年の比に
しに自害して頼朝のことは同じく蛭島へ
流しかひぬそれ此島にてはたしかに
田方郡北条の地にあるに是乃居之数ある所
流罪人の使者伊豆へ来て蛭ヶ島にて足りしといふ

粗利ハ小手ニ流さん二十一年の星霜をたてしく
かくりかハしゝ後世尊寺家迄の沈宮様
法ハ皇清書とおり得し天皇殿を法しまてゝ
是等ノ人よりかゝ中殊ニ尚書をハ代書法し
古精能ハ法をとけ奉りわざをもりし右筆ハま
事世の重後ありて物好し唐国ニ寄り筆とく
いふ書文の爲ニ此時の錦を之芳帝ハ長源ハ
各ニ文字ニかゝ流ハ水よ文字をまよひ流
毛筆并人ニ又十廿俵一切萬物を書記を是ニ止
海経ニ其外是ハ事ハ人ニかゝり修紀の人事も
虚云是ハ手といふ人も知しはあるをとも家
其ハミしく名得あらまとりて利ハか自
せられ人用ゆる事ありて事をぞれ和漢会運て
かきしいふ古しへの能し星をもて書尚よ桐遥多
し内典外典に廣きあれハこれに二楷よあしれこ筋
来の据まかしにもあや有ぬ未来まで事を見て
ありへてしハ都て世間のるハ宝徳定之霊ハ應せ
うきてよくさうぐ若してもゑ海して手を得させ
廣大なりしてるてん様んこ拙理も其品世出て事も
筆よ頼みハなりしと之也

仲信入道講に好む事

中ころ京の所に仲信と云人ありけりさ
るほどにつくし世の中のぜんとうをもとむる事たん
飛花落葉の風の前には有為のてんぺんをさとり
電光石火のかげには生死の去来をみるを
常人相続の謡によりしは道へありけり志事きはめし
されば大物はかるにかけしかしこれ見るをしあ
すり孔子むかしを思ひて云時は貴きのみ
門弟所の心の人子のことはいしは尾籠あるいは
様も謡ることは天の奇をあかしたると云言葉ならい多く
とは云は道へはりしと云前句より芸能をくさいに
ふ偽計て一念は申と宗種うけれは執心
似たるんはりは此事に深くすとはいつもの句ともも
説法などといへどもまよひの一ツもんおも遠ふくかるは
うだく深く色きれ随喜義みことしは悔く
ともかく之史にはよくて仏は之果をもとのしの
おんにをと西楽世界へむまれんとては八万四千の教
化のと説法かくはんもきし仏法をさ智首之人の
ちは程く極めたく衆門のがれぬ座門をよ
廿年州年をしへゐにても流転生死の業

聞ハなせどもくあきらかなれば浄土菩提の妙業
めでたかるべきものなりとも傳へしひの年までなみなど
白川のとも源にはる捨人の物語しけるうし
迷ひけりとかや御えんなる方廣寺の境界柳にこと
里宮ハくまなび能忍禅師は法然達る思ひ侍の
よれは茎まは行なるはなかば片瀬のうつともなるこ
源せる妙文西家のかくいひぬ教まんと云當時月
絶ぬかくぬ縛をときけれや後仏と法本の加つけ
源ひ妙花はる迷へぬ聞やく極楽をもてまいらせん
たのしきを一目見るもかげいいたしり浮世とのぞかく
浮べき抜きなんハ千萬の見るをまうじとしとし
中さはしと云光見老人の足とゆかて史人のしたゐ
おろかなるにもかくはひしめさべし浄のめしとらえ工つく
ほとひまりたるはまうまだそしてく史伊法信をとゆく
むくなくびそんわ地獄のさなかとなれる継先をしてふ
前信をあたびしうぬ九十一になりしばまでく
ありしと後しくしと之ら後撰集にあなたときまする
たがれは極もそのさけぬと妙文おはかぬとに姉
が何かあるきしくるゝ身撰を源もちてしら利根し
迷ひ毛のさゆてさ志のきんはるきまへめんとなるこ

人なり漢書によくすゝみ天にもうかがひし見
さればこそ海ともいひて風月に詩をつくし
之をたとへし好智の其の一人明けくれ恩ふ方武
のさむらひとなる所にも立所をしりぞき君に紅
菅神菅神に叶ひ非道をとりもちける人の邪佞
讒し罪をさしまし百枝を断て梅をもさかせ
いかにのおもひに讒者にあふ事もなく世にをと
さかへしぞ日より國々も崇にしおもふ顔
よくていか菅公をゝも信りまこに動よりしく
弄ぶありまゝにして給ひし天満天神北

神菅丞相をなし給ひし天の原を照しれて佛経をと摂
しもあかさむく事にて月世の雲をさらよなりしん
しら中けれし

久米天神清の其外家々入なるの事

人しくらて津に通町に久米と云ふ社あり医陀
の東しる云ふ所日湯浴の天神へ参詣せしに神
田丁作りてつきの法をかて切せんなとあり
それより是物いつるかさへと一度は
登へて此物へ立寄我天神へ参る者ならば常盤
の法をよくて切中進せく せんなとしてくわん

さりけるに代わかあるせに給はりつぬしたりし人ぞ
菅原ぬし私休とみてして一見せし文價之
ここぞしいかに宝はきこえて天神と崇めたる云
志よぬここのよ中にも志賀國しなきて天
神へ参りたり帰るさに見たる所にとんまがな
かしこの家にしけるんかわらへ人見たる見たる
家に行つきしに梅もし御手を筆止やいとふし
中にこそいて常にも久米山の事ありと見え
ここも梅もしきこゑれど花祖もしそらは是無けれ
したる家へ見ゐ給ふのみのにし宣へば無家を宗なる入給

十四五計しもまとこの五月まで織よ峰寿也
乗のとほりよりまかりの間よ死なりしと云久米仙
とはまけ入いかにや云ひてき家を見んわらで天神へ参る迄
わしき世にしてありける医者あり峰寿の坊
みえく死ぬ處にて中家外にもとまもあらこの命と
御人母しいふ聴迄いはくとも人形を中
にもかくし云久米仙むかし升売ありし一升さし
常ねたし戊者いきはつまわしよ云人見たる是非
なくく梅もあしきの出合して宗おもむきたる
ここに云術の勝利あり母文いはく華佛の限業しとみえ

おもひ有ハ陰陽生じて示すがごとく人の中にまれなるハ
かゝるふしぎ邪にして偏せいる仏神の示恵すくなき
在しまれたる月日を照しかねるによりてこれを
ていふ事ハ慈悲正直のうへに人の中にありて陰陽の変をあらはす
人をも利するの故ハ天地是に叶ひ人をも備へたる
事にハ天必ず是が為に叶ふ物也さるによりて慈悲
ある人ハ天も是をたすけ自然に威を得せしめ
列女伝に陰徳ある者ハ陽報ありといへり四徳を不得は
うち仁を百福をそなへしといへどもちかくは陰徳有
者ハ必陽報ありといへり孫叔敖ハ両頭の蛇をうづみて

殺し埋みたりし陰徳によつて終に
令尹といふ官にのぼりて楚国の政をとり行しも
陽報の理りかなひしにあらずや又周の文王ハ先祖一代の
民に恵みを専らにし給ふ事ゆへ今の国のおこりし也
とし家臣にかぎらず人の心の中のまゝにまかせて世をおさめ
給ふ故にいはゆる文王一人の徳義によつて天下をおさめ
万人の心をしたがへまいらせて古今の善事に周ハしき
時を天下にまかせ官位をきはめ民の為につくし
安くしてこれ〳〵当代家の次第にまかり
下万民の下我の心のまゝなるをしらず歟

心にまかしおはしまさんなる神宮寺といふ寺を建一里[illegible]
づゝのしるしありといへども之を律の義なくして
通じ理あるを悪しとおもひて是を地の神仏の
ことなりと信ずべしとや

一里つかは法文の事

それ日本国においては中古以前安楽にして世院[illegible]
まづ下に君なき事ん[illegible]しかれども[illegible]
むかし月に御信仰まふける[illegible]時代
然るに日本の我七道は人皇之十二代用明天皇御宇
よりさかのぼり六十六ケ国にわかち人皇十六代文武

一里塚

天皇御宇に及ては日本を代〻に定め[illegible]
奏上あり六十一里つゝにして構へしるしみの東海道を
初めとして六十余州八十七里を極め又長門西海道に至る
一千五百七十八里に限りとしる者なり[illegible]之
然ども是に據るにして是に依て当家の御時代に
一里塚の定まりしき御政事これありき日本橋
は慶長八癸卯年江戸御城新家出来に付[illegible]
橋あり新橋の名人間いつ[illegible]天下[illegible]
中なりし地にしてやわらん諸人一同より日本橋と
呼ぬるときたれのふしぎに[illegible]相成

いれり此東西の中国にいたりて[illegible]江陵

りやう橋と一つ橋のわたしにさため三千二十一丁と道一里まつも

あるとしもなりて西のうへにて宝蔵七道より[illegible]わたし

一里程をつゝせとかや年久しく[illegible]しけるに[illegible]去

遠橋の有せきしかるにわれ曲りたる[illegible]しくしい

せいしつけ道をひらけ牛馬のわたりめやすをたすけ

よ有そこのときよろこびの道にてよ松橋を椎山にてたび[illegible]く

橋をかけ大河には舟橋をかけ日本国中西方往

行のたよりよそへからすのぞみ九千年も万人欣

の自らいたるなり蓋蔵をいかへ[illegible]ます

将軍国王の御患悉代とてもいかなる是をとも[illegible]かなはん

真言浄土法論の事

見しいふは縁山増上寺行持貞蓮社源誉普

光観智国師しかも浄土の智識なりしかは国主も帰

依他の本願を尊く善導法然の化身として伝へ給ふ

天下も毛利師とし給ひ[illegible]師とも諸家とも所々

[illegible]一揆[illegible]の御宗旨も仏閣甚[illegible]なる

らべ七宗とうつめぬ康[illegible]とならん[illegible]

やしん[illegible]市[illegible]法の常の法の[illegible]

百八ぼんなうの生死の苦をとめ[illegible]やうに[illegible]

浄く祖さんの門よりいでたる人〻やあるなれど
其中に善導の外より人〻出でゝも名をとゞめし門弟をも
しかれども師の法流を汲て正しくつたへしが旅は
いまだ一人も佛法修行とげられしことは石山川にん
かんたるのもしくもいでたる世上一向専修といふ事是第一なる
西方の弘法の大意を法然上人としてやく此事にて是
佛家の教義をせられいぜん抑されんと大方の世の
衆生にかつ〳〵より得分をきへといふもなき
この時のに清風より水の音との聲ぞ〳〵ヶ月八日に
あとのかた〳〵候良のつぎ〳〵いきどほる人なり

地獄をもきはめんと日本の大導師として不
化身をもとう〳〵すし〳〵せしを願力人〻をまで
お救されんとしあまくいらくしく〳〵あ良つく
にはめでよろこび法師人会して貴賤の人〻集
相模荒神よりも出て門徒に念仏をさかんに生仏ま
こと〳〵しあまたいふにいまだ慶長十八年の
三月廿二日のよるにて中居の関へ人々あまりて〳〵達
年をしも扉を揚て清殿をもて幸部をしめさる
承元之宗之千人御集りありて幸部をしめされ
其後のよしありしとしてその後は清殿大門より

弘法大師相伝ありて秘宗所に[illegible]所に
浄土宗法然上人は善導大師の遺書に依て并
超[illegible]撰取理[illegible]ありて[illegible]撰入堂問
善導之疏を宗とし[illegible]其後[illegible]三宗蓮如上人
て文明年中に[illegible]かの濃厚山に三昧堂[illegible]
山行で浄土の経巻をとゞめぬやうに[illegible]
事を筆の人出でゝ仏前[illegible]をとゞめよしと書く
ことゞも又しらしめ筆記をとゞめし其[illegible]教道り
及べり真言宗には高野山智三院を始として[illegible]の
いまにおいて中[illegible]をゆく[illegible]浄にて[illegible]備[illegible]

定まるべき旨額する中にも別して此度山門新倉台
倍此浄土宗の新義異義の出来し浄土の法まさし
これ浄土への門ひらきて[illegible]宿ありて[illegible]申し[illegible]られ[illegible]
当世法[illegible]智恵[illegible]をいと[illegible]
宗[illegible]有[illegible]時の待よは[illegible]
[illegible]浄土[illegible]威光[illegible]
深く[illegible]十宗よ[illegible]徒と[illegible]上
将軍[illegible]之[illegible]浄土一宗
[illegible]寺へ浄土一宗
の法度将軍家[illegible]御[illegible]さる

浄土諸法度

一知恩院之事立置宮門跡各別相定上者不可
混雑寺家引導佛事等者定脇住持如先規可
被執行於十念為結縁門主自身可有授與事
一於京都門中擇器量之仁六人而為役者可致諸
沙汰曾不可有贔屓偏頗事
一碩學衆於五戒傳授者調道場之儀式可令執行淺
學之輩猥不可授与事
一對在家之人不可令相傳五重之血脉事
一淨土修学不至十五年者不可有両脉傳授殊
更於璽書可許器量之仁不滿廾年
者堅不可令相傳事
一糺明學門之年臘増上寺當住并其談義所
之能化以両判添状可啓本寺於滿足廾年
之輩古者可令頂戴正上人之綸旨不至
廾年者可為權上人附十五年以来出世之
產頭可有正權之分別事
一非古来之學席者私不可立常法幢事
一不解事理從横之深義着相憑文之族貪着
名利不可致法談從者叢家尊宿之許可雖令勸

化空閣佛経祖釈偏事狂言綺語妄莊愚夫耳剰自讃毀他最是為法衰之因諍論之縁堅可制止叓

一 往来之知識等其所之門中無許容聊爾不可致法談事

一 若輩之砌及十年致学文其後令退轉之僧望色袈裟者依其人體六十歳以後可許之但於上人之号者可有斟酌事

一 於浄土宗諸寺家者縱雖為師匠之附属恣不可住職事

一 就相替古跡之住持者可令血脈附法相續於為前住没後之入院者至流義之使可致傳受事

一 紫衣之諸寺家之住持致隠居之時可脱紫衣事

一 大小之新寺為私一不可致建立事

一 借在家構佛前不可求利養事

一 於知識分座頭者以血脈綸旨之次第上下品可相定事

一 於法問商量之座敷者以学文之戒臈可定上下其外之至衆會者以出世之前後可着座事

一 於所化寺僧之會合者選擇以上者平僧之上可列座事

一平僧分中声明法事等之役儀有其嗜輩者同
臘内可居上座事
一不辨階級之浅深恣高擧自身對上座致緩怠
輩者永不可會合事
一諸寺家之住持任自己之分別背世出之法義者
為寺中之老僧并目可加異見不然者可屬同罪
事
一白旗流義諸國之末寺随其大小集調報謝銭三個
年一度宛以使僧可備影前事
一出世之官物之事　綸旨之分銀子貳百文目
参内之分五百文目若為両様同持者七百文目相
定上者不可論釆穀之高下事
一末々諸寺家者従其本寺可致仕置若有理不
尽沙汰者可為本之私曲事
一一向無智之道心者等對道俗授十念勸男女令
血脉寔以法賊也自今以後堅可停止事
一悪従出来近年興邪教違経文釋義私勸安
心關六字名號称三字廻種々謀計令誑惑衆生
是天魔之所行速可令追拂事
一號霊佛霊地之修理不可諸国勸進事

一如旧例夏安居従四月十五日朔六月廿九日冬安居従十月十五日可至極月十五日前不可有延促之事

一於一夏中客殿之法問十則下讀法問十一則無闕減可令決擇并湯日之外不可有談場懈怠

冬安居可為同前事

一解間之事春従二月朔日期三月廿九日秋従八月朔日可至九月廿七日如両安居物讀法問不可有懈怠事

一頌義十人以下之僧不可為寮坊主事

一諸談所之所化自今以後縦雖令作山老若共不可付晉因名事

一於一寺追放之所化者諸談所之會合不可有之事

付寺僧同宿等可為同前事

一諸檀林所化之法度悉以可復従上事

右三十五個條之旨永可相守其趣者也

慶長十九年正月日　増上寺観智国師

かくのごとく禁法浄土一宗に於て信致せらしいる為しおきて浄土乃佛法弥繁昌仕りてもちう扨又慶長年中公方様より　関東真言宗へいヶ條の法度

何也といふに其中に仏法興隆の宗として
如法乃行学をも専らとせし也然るを当代は禁法乃
余りなるによりかくのことくへ佛像色紙乃率都婆をも
切りて捨る事無遠慮法をねたみ人のにくむは不入
の捨られ如何ぞ足るべしへ又真言宗破滅の前表成僧
しかして中々住持へて未だ捨られしより其後早千九年の法
流法をも下し宗乃法の事を二つにわけて又云も
なしとせば世界天一宗の法一相一味なれども元生の情欲
たしかならば依て解するにより法つかみてえ申間敷
修学を邪人正法を説けば正法も又邪法と成人
邪法を説とも邪法も則正法と成る仏法の色能得要
世尊は相当一味の佛法二実を索所一切衆生草木を
出息大日は法華摠文浄土宗は八万法蔵教皆是阿
弥陀と見ゆる化日実体の法なるかくは色心実相
みしるべき弥陀万象山河大地弥陀に候もとゞまる
なし他行しきんば自他の勝負もとゞまれし凡自他
門一字なしかしかれ凡聖不二なれば何を求め何をか捨ん
邪正今に何らのか我法なし他法やなし云ふ凡
しるべし是唯当一宗の法の色を本大仏正覚
なるを証せん双方寄用は浄論なる事の道へ候

法論するに必難ぜられやこの国師慈悲年寄に宗
しゝ諸宗乃心地家ひとしめ真実随縁の人は
他人の足跡とをしめざるとの人古人の言葉をひとしん
あり丈夫がいはくと換之へ豊隆にて乃に急となげ
なふ是皆後の教生をもつて并の六度作ちたらすまゝる
やうや吉偈に紀荒のあり時は三寶荒神静まるなき
おもろき乃出家の人に清く聖冏師よく随ひまた
たしとのりなり
永傳師直授に教ゆり
みちしるべ上野におゐて根にち処に花園たちきりたまふ
永伊に三拾年の壬とせ三人へきてら後執は七年に何ゆうら
すゝみは早年に及へ主師手二人へあたる乃所かまへの手をとるすく
諸乃へしゝく之へより光得をくし絶手に云庭守子師
西の首をそへへ主報し杉苑之と握飛にあつめよ
これを云宰の主かけして出家ゆくのれ手子の首に
縄かけし深き人へ来りたま流出家に逆の家人
云てしるへをゆりと後をとく浅草寺にてすかくしてその
小かうらし是と見かく老人へ中されはかの世可と存
おもし親しきハ家信師手へ文子の為にとこそ
しまゝ飲んに来ひたてしまい井のあしくきと承るまて

人間ハ天然自然の性を得て常に居ることなく
さるハ汎しく唯人欲の為に閉塞され様々の
悪念をおこし思慮をめくらし学の要道を知んとする
所作をハわすれて身をくるしめ法花経に説の
若しかのは貪欲をおこし世に流るゝ一切の境界
いまだ我の空想を知らすして悟道の縁なり
煩悩と法と真相之雨来て生変ハ今生此の名なり
たのしみを離れ業因果報をうけて三毒五欲の悪業を
好むと云悪口雑言両舌をなし殺生戒律を好む浄
土の云の皆知と都人之に居るとおもふ道也

是故ニ仁者聞之とにかく書三宝欲なき名利静に為に
名利を好けるを人情とかしく陸奥なる輩
子孫迄報を浮世の離れ所に帰
師仏経漢籍を教えし衆生の者ハ宗旨を知
世間にハ学なし書物国史世間の極み若しくは
隠居して此世に居る二十年十一日又二日
其量宗教卯の月なしもとハ仏神をも祈り
情欲を離れて真実解脱の門に入るなり
まかしむれ心経怖畏生死の流転無量之人々
の情しき欲なりなしとぞ

江戸を都といはるゝ事

されは今天下治りて将軍関東武州江城にましまし
給しかるに鎌倉御世之右大将御門より蒙勅をうけ給
無事勅使定をくだされしより寿永年中鎌倉殿江戸之
従三位井降御代のは都にてしかも花ぞかし
たゞ年の春秋の御遊は九條殿御事を御随行ありし
之者共にわかれぬるの時ぞ其のはての嵐吹まで
とやかくの事とも[illegible]はしけれ[illegible]
人東国の山と[illegible]海と海と年毎に[illegible]下向之
て将軍を[illegible]しより此山もこれ[illegible]や
東路にあれて往来絶ぬれはとて三条中納言
実ありしかしぬ能因江戸を都といへるは是
京都を人中されけるは天下二つなき日本の地
にも二人の王なりし其内裏をさへなれば
ましましけれは都をいはんは二つの天下に
王も一人朝も一つなれば同じくいへども武蔵左
大臣いひし将之人ども天下代官を擁し
将軍関東治りて以来こそ都といはれんさ
れは鎌倉を頼朝公治承四年の冬に治められしく
らましまし左府に極くやかの山に鶴ヶ岡

拂の那法銭の星と稱せり也 将軍形ヌぶ
立世の時二ヶの都と號し鎌倉と都とたてらるゝは
甘しゝ今の世よいまだ用ひざれども鎌倉の人のゆえんはん
思んとて人をつぐいは回念人なうれしと云得へたる家の
云ふ鎌倉の人にも心を程よく之を抱え文東清の文公
ゑらんしぬ第か申てにより彼法為以下告白念人
觧まする人としるへきまつ之為顕に天竺の震旦きを
號し尊ぶ其例より見ぬ遂に世界の王の教を
七千一十八生まれしたまふことの三皇七帝世代をしあ
かれる天の道にかなひ人民の政をも行ひ為く是
天より何の安楽なる一人のみならず由縁を地より二人の王
為しと王子の月尺之たり周の文王武王を治め王道
十六代まで続きしが後もまた周の末ゟ七郷國を成し
周自七雄となる帝王をも諍ひけりより自ら之し
王室と哭しきて國々の民たよるべき政を行ひし
事とも春秋に妻記せり項羽高祖の戦ひ史記にあり
五帝を紀として後漢より和朝まで大聖徳太
子の時に是をまなび給へり一二十年にて佛法の吉
しさとしり宗旨に首目は何の為なるを知しぬせ
申し給ひしより給ひたり先に孔子先師顔回の徒

新大学寮にこもりゐて 佐與紙にて[illegible]を作る 其
秋の礼贄にて奉る。庵人のかしこき 新そへて
[illegible]
よ御門[illegible]都も見しと[illegible]
[illegible]歌あり また[illegible]の歌あり[illegible]
[illegible]や つくいうけ歌を[illegible]の[illegible]（寂）（先）
哉。人の[illegible]
[illegible]歌[illegible]
[illegible]都[illegible]文山[illegible]
[illegible]の[illegible]

郁[illegible]国乃[illegible]
[illegible]の[illegible]文人[illegible]
東山の[illegible]
[illegible]京の人と[illegible]
[illegible]
人の[illegible]文 京の人[illegible]
[illegible]京の人[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]人[illegible]

こしめ本朝の治り形邑をつくることを能くして
きんにて東洞流大人陰和にてあしく傳へる論ずるに
新きが方薬不生清明の代天下乃安楽を見んとなれ
なり

南都りくさくといふ事

みしいつからうさん中にされ人びとを成つる者によ
らせしもあるらい家時花藥をたかけ用輪をせんと
御とたくし言葉をいふ人の方といへど用ふ治方
事御しかりくさしてもおしはかる老人の中にさ
後らく世話のあらうにいふ何をも風邪を言う治りしと
出るなしり　あまりある医道の能を聞世病をしん言ふと知
ぼけなくなるといふ人をしまる病を知れどいましく
聖人の世にあり我といはしく道として時とまかね
参へはちくれいもまたよしとしてもうしもつや今
いま在混乱の時節なれど和漢をもとちあらく却く
医病にしもあらずして二つてゆいでもまたかたる
さる身の中のをかげき咲ならび従ひて治経散乱
しく辛れ於るをもつ人には譽次安心の静が来現
志医御医をいしてにとらいふらに世病薬あらくも
治しかくしたいわのれがなすとて下りへ愚まで

潮りのさんぐ見のこゝろやまんよう志うぞん
と酒をものまばんまゐらし堀川右大臣ハ常に
身代知らしん人へとうしもへそちう落花しうち
心をひらりれと縁しめ物にしし孔子も天を
三ば心ば人ともをふめとだし其一人つ幸士外ハ義
ま言しう法をらを使し假ハ富貴を指折て記申し
ぬきをばうし陽由をざだしてし人のなんぞ己ゆかりく
かりそめにも記しきる事也

浅井原蔵師の恩忘る事

昔しハ今ハ江戸ニ丁ゞ浅井法庵といふ守めき人ありけるハ
おさなき時は常に出入し師匠今我に宜しるしハ
むかし今銀藤蔵といふもの源忠を師とたのみけるや
うちにさいしに皆がたし家をなされぬ付といへるゆゑ
事あるへき都よりまいりまゐらせれやしとせられ給へば
源かまもえをゑらしるしとりてへまいらせ人気色し
此はさおろかなりしらる源庵師は君源をとおの
かきりまゐらせをまさ友七ゝ人をさて師の敬をと海
すゞと云ゝ唐のう師匠は魏のおしまつを小事
向はいけるを忘を備へ菩提ゆゑ酒をしたゝめしまほら
祭る拾ひ文のもる華毛馬の血と白鶏乃血と合

たゞ終せたりとて後師とたのまず手習をやめぬれば
師匠を疎かにするもの少なからず是いかにとなれば
が為なれども一字を教ふるも家に宝珠を得たるが如し
尊べし一字千金にむくふとも一点紛るゝなき
くるる理は親が生みなす心地親に至極の恩なり
主は忠師匠の恩父母の恩君と同じく以上三ツの恩
知ることを人倫知らざる時は鬼畜に名付くべしよ
三恩を重んで忘るゝは是一ツの恩を忘るゝにあらず
子たるもの能々学者の道を弁へ知るべしも
書を学ぶに一点もおろそかなる事なきやうにせば
忘るゝ事なし故に古人も手習学問といふ筋
れの道も学ぶ始めに知るべし其筋を立る事も
ば師に親のごとくすべし孫の如しと云古大師は
（繹カ）志やくしかへりみるよ学ぶべし心のまゝに任すべし
同じ手本は楷行とも風俗流儀は群立乃ちしたまよ
三流ある如し都て悪き事は師と師との由づけし
あれども師匠たる者の教ふる事も両文字は
中頃よりおのづから志もうし流儀学してこれを
一人の手をくゞりて千人の前にも出づるとも
当する者蕃しきくいかにしても書し

ハ水邑にもわたらせ玉ひしと今より学
文つかまつり度候へども手本も御座なく候ニ付難渋仕居候へば
帝王御筆法ならびに名筆の手本なとし
されば今般御姉の名を得られ候事我等が
筆道の御指南なし下され候 此法道風佐理行
成等の筆意にて能筆の名高き家の
従ひ候て今日にては書の道を極められ候事にて
下部の者まで事実に承り居候
それより江戸表へ参り今日只今尚居
大御所様之御筆蹟に相成り候て此御筆蹟
町はその名を聞けば御中へ江戸本町一丁目
まで参り候 御家様へ御出御座候て御家ハ
御殿乃大名の如くに成候 御前様御機嫌
能く御座候而此度御銀をかけられ候て
金子御渡被成候而御家老乃衆中に御知らせ
右之趣申越す町内にて申渡し上様の御意を以町北
之の御沙汰を蒙り候 上様御機嫌よろしく
甘の者へ是とも申候 金子ハ是等果報の者
上様の御目見仰せ付けられ候此上の
下され候事 左様にも金子日当候へバ

江戸町にとりたて過乃大事を仰つけられ出させ侍
るに打たえてハ此甲斐月給事ハなきによて
大事をもとより中々身をたてゝ家をもたしめ守
金さへあれバしかもめさるれバ町の者ども付たりし
此世は元の比とかハりしかバさてきさまぐ氏は
金六と云浪人今川平の何某とかや太郎あれバ金六ハ
口をも撥て門をもさゝへ山がくし世家へ浪人
入りてけり町にゐの本を合はせしめよとかたられたる
四条町に（勤 捻）しし膝を撫て記さけ出し明して
身を悔み此くせ浪人をよびにやりたるかやう
扨て浪人家内へ入て此方衛門云れとて
町衆とのいそ之人々皆出し年ぬれの者ども出てくる
金六も町人うちゐたり親とも度も町人を皆人金六
にわかに驚れぬる也ければ此事の義もの僧に
さて驚かぬ男は打もいとゞかんとしたるに金六（がせん）
たゝ市の事も町をもちさはれし浪人のまはりへいりけれ
甚之町人にハ此金ぬ大小刀を扇にてなぐりけれど
年ハ七十ばかり勝ちにしりて扇の先で毎度町の
先ず原此根（つき）て見ゆるもの世をふりきりたる今
六方くハ浪事も何をかくしたるべく

不入

いふ家をたすけて三條殿の御事なりとて公家せる
今上の比にて御代ゝ知らぬ籠に入由し
上様の所望有し望人なるなれとも御家に
尽し奉り是よりしつゝ年三度を上様の御大事
雅意有り町をめくらし給へとも深町は為なり
に御入分れ石を出ても義なからまでしてそ思へ
と思ひぬれとも御前を人もたのみなり
いふ殿に不入置といふ宮に上之へ參侍り
時人の御事いはれし人に口のえつらぬ
と給はいかなる事や

佐役高正名

三條年中節会の事

みしは今俗に小野妹子かへる
深き人の局に節会せられし時ゝ上の
出しに御らうの宴を一同にしてつかはす
公の軍に逆ひ是は天人の影向やと思召す
代々の世は楊貴妃漢の武帝の時なりは李夫人
家親のいよし人なしは陽成院の御宇の事
さるか姫出羽小町とも見よいふ人は
郡は娘の月忘ぬまかりしといふ今宮の花の作
沙門か神の様に常に是化生の忍んそかくされ

しまひかね鹿の高いとふかさびしくたゞとれ
始し今だに月みれさ御迎来らす仲うらた
是非もなくいそぎありしたおろうかのしとの事治部之助
に参りし来所にて御良月沙をうち鳥ふしろう
門のきま方すそと御出世ありし一勝ち本そうの
隆平古村の中に井筒枝へ梅若丸をうち立ちぶら
かの人へたちなれば重直寄りほとりしみまくい
せしまなしびなふうりしける平太郎は今持ちまし
たる所は母やはなさうけしもなりんぶんしく重直
古佛の郷し奔走年ふけが一命のゆく西きぞ年
よひゐる事も涙けし見てといひ平太郎見と云つき
いまぞうりあそぶうれしみ人の君しかや左近亮
の勧をやしがも乃子是たしび我年月沙とう
守あ重直も母勢してぞ帝まいりぞ母びとり注け帰
乃孫子あ存の事しれずも今こそ一代のゐるうと
思ひつまとも今井あらば文も重直勢へしくば香
の重代成しし上様御子二夜あらんとそ西大一言
をしたしあふかれも高井も所まで出す男の名残や
ありし家ぞうまし母とをとくく兼平浄く入
平太郎見とをとくはし後ろの上様御の風情やい

まことのたとへいつれいつれならしけれとはいつれまされ神乃むすびあはせてしこそよろしき偈なしいかにも鎌乃かまの庵にかたる物語の家にとさくらん人にも和泉式部しりうこそやまかくまのうちにかれまさこ花さくあさはなりなん古ていひあかしこて源氏（みなもとの）御事をしるし書れたる昔ものがたり又業平四位のかはり色好みし小町がそしら九十九髪を思ひいれけるにやこれは在りける業平ならねどもいはゞまことならで人しらずかくしてその名をたてもとらぬこゝろ清少なし定子内親王の御もとにさふらひしか中く、まゐらんにいふまでもなく人の心さまにいやしからすあるまじきことをまで教なしぬるはひとを罪しされば仏も説給ふ一念五百生をも月ことばなへはあらくたらし阿修羅にも鬼となり己が爲をくしらさんとはいふこそこれは想乱のつきしゞ業のくるしみかしこくおもひし目もひやおもてるしやと云中こそ見を業たれあるまじしくや思ひのへ出家しをも徒正云されど一しそいふもこゝ罪をもつまばつとも

よしや醫師[illegible]むさしと左へ[illegible]かしらの
やしなひて[illegible]まはるをあはれ[illegible]
身持[illegible]たる物好[illegible]ハ[illegible]肩さへ[illegible]
[illegible]只是流の[illegible]中して[illegible]の
元る月といふ中ニ[illegible]男のまさに
[illegible]しや人[illegible]鬼[illegible]乱して俳
ハ懸人会[illegible]却て[illegible]死しかるを
[illegible]けるまの[illegible]のこゝろ[illegible]よきとて是
[illegible]のき[illegible]かし只一夜逢てかれども
思ひと[illegible]けさせ[illegible]されバ[illegible]して[illegible]の[illegible]て
よ[illegible]されしかども[illegible]乃[illegible]人へやさ男よりは
[illegible]のくん[illegible]へしも[illegible]のいきあり
[illegible]平左衛門と同しむしるよ[illegible]て一平左衛門
[illegible]よ[illegible]もし[illegible]事[illegible]よ
[illegible]けりよきれ夫婦男女乃か[illegible]ひとすんとい
[illegible]ひと[illegible]はあし[illegible]根[illegible]
[illegible]の[illegible]て[illegible]
ひと[illegible]などや一樹の陰乃[illegible]
一河の流を[illegible]も他生の縁と[illegible]して や
[illegible]の[illegible]男が一つ

成り姫しまいらせて新枕しぬ此より
いく生のきえんぞかし神や仏をたのみしられ
先世来たらば善をも知りぬればせさしさぞらん
後の世も又後の世までめぐりあひて契りつらん
のこるか縁し生まん事のうれしさよとてし
わまでまゐらす事あましぞ同じくらゐの宮仕へあり
其侍従さんとくらゐり正三ハさまらぬさく
御身ひとくし御いとばらしくつまさく御方々ね
告げとるべき平大納言とも政藤いしやかくらん
いひせしのおろし中にかき月日として見えくぞ

声くらりとや聞きゐめれば我しらく一声
秋の夜の半夜と一しほなるこやらん秋ぞ
中にくせらるる正三位秋のよの花よりと
其のとしつきを惜しみなれ色ぞうしと云
こし夜の明くるか待宵の鳥ぞいふ人そと云ふ
平大納言がまとかあしと鏡るれせんしらぬ
さりし正三位の御家の御めかしく後し
思ひでて家々にしは中んいふと旅へ行き沙汰
かくれなく御志無人ぞんばば此世を
関白とて世の中をせまくして家々の

し世に出し来りぬ寛文三年つきさしは正月の是
初よりさくらき江戸町々とめて出る皆人来る太夫を
見なくて出羽さしてつきはあくり是なりける
岩井さかためしのりはる関川太皇さん言語
しも出ては三年ころ万年とひき出るとかりおと
かや茅よりなるらず時ずかうてしまうる
しもさめに平左衛門と出るは多くせらしず
竹ノ歌舞伎太夫たりし名をさる事
みしま江戸にしはる町山しとまる三月ある
からくり太夫なりきかどしうなる日本橋子札

うつさき太夫

ところ江戸又座を建しめかつのしをは人気
中にも当播磨太夫は世に用ひられよろしきやさし
く言頼は花にしてあつと
花むかん言語しる物を太夫人相
曲にたらし語りてあるはさて是天人の音楽の中小
迄江戸に金平八郎よく及まして太鼓小鼓笛太鼓
の江戸に小男相かるなかれ金を入郎おる
土佐のなりてて相ハ大坂に座を建たる江戸の
江戸にまで形よく江戸に程風情
なとしるしぬる札物の江戸太夫江戸新の弐三事

池齋合傳

の足跡とも見るハいくばくなつかしからぬ、ありし儀岸もく
尾もしさるとくみぬにまさるましかりける池
二府之御陰にて酒に酔ひまつの百姓ぞたのし
いふもさらなり、さる風情ありとかやゆゝるのまへ
扣しく御前物ならず、まくれる事なる有の
無為化かなる故に、此の上いはゆる事への名人
学者ハ、とき書人とよぶ、皆はるかに筆ち
心得ても自ら胸をひらかれたらぬる人、名醸譜くし、是を引
風流あり、其酔体をしむとも、其酒の流ハあいは便へ
しまさらる莫、とつくを呑めしく、浄土の事もこれ

さいは其名を以て今ゑを飲ませ、なばかり、凡二八九に
おやか形ちも見出し、此等の事を悦び、世にあり
しき今の酒を、筆の毛の長きを用ゆべき
二千年へ大津に酒家しけり、今ともよく
藪かに一曲一曲をもてうけ、あひし杯をる、去
況んや其の酒者は、形似とし、難きをん
よかはんに清き歌みたまへ、古き昔人にありし
おもひいでゝ、其の月めでたくもとつきし所を
これ其の昔有る前にて、曲当も御帝の時に従ひし
鼎の逸乃後者 自然顔してるやうにし世 其曲を

ことに縁り女の絃遊のこゝろとして當るなし

されば昔人是をもて一芸とし学びけり

なかんづくあまたの事にかゝはる[illegible]庸の事にまで

まく[illegible]とゆるしは謙りしきの上をなくにかゝけり

及びしき女の絃のこゝろをやまされたるに仙女

之用とふのが家職をしてたるに人をして第一とされ丈

ごとく皇帝其宮様文に呉君をとりもちられ[illegible]

小笠原の是のみにも少尤篇の奥まで家の芸として後

く召人の能をもとし知る藝はそのふ藝一節の

やま[illegible]をとよび候これらの流儀の為下に分

或人のいはく情をのべ[illegible]利根を智るくは琴棋書画と

ともに学べば是につくべし六藝中絃のうちにもいつまかもしも

学ぶなれば一代男子の為にもまさるとも及ばれ

情あるが利根なりあかりしなれ中にかなりひかる事あり

さるゝものは世りん人の耳に流るゝの外は藝能にしむかし

一つ芸は学び得るもこゝろ情あるかこそのぞましあり

命とぞいふを行なふ道を萬法にかくべからずとなる

形の道を中々に形作りたゞしき道に学び

かこしれ者[illegible]